

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2018 齋藤希史

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



# デジタル・ヒューマニティーズと東アジアの人文学

学術俯瞰講義

デジタル・ヒューマニティーズ 変貌する学問の地平

2018.7.2 齋藤希史

はじめに

書物と知

朱熹の読書法

デジタル化

モノと身体

ヒューマニティーズという方法

# はじめに

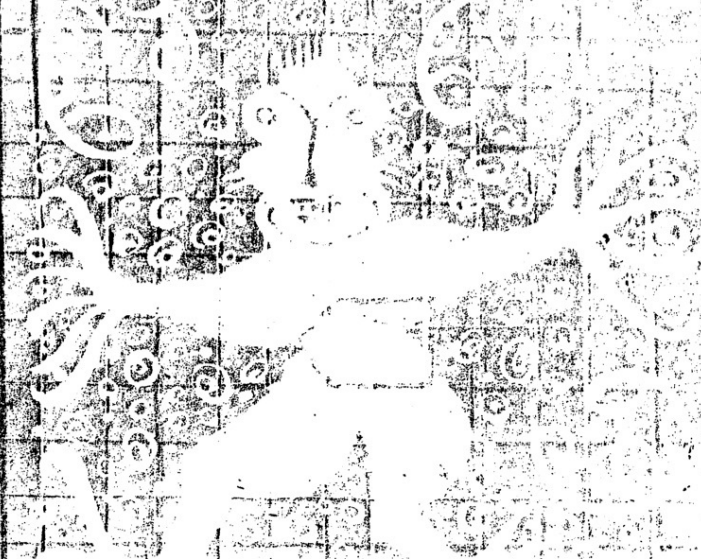
## いくつかの視点

- 中島敦「文字禍」
  - 『文学界』1942年2月号
- Digital Scholarly Editions (DARIAH)
- 宋本論語注疏
  - 武英殿版論語注疏
- 直江状

『文学界』1942年2月号

# 文学界

二月二日 號



文藝春秋社

文学界 第九卷 第一號  
昭和十七年一月二十一日印刷 昭和十七年二月一日發行  
昭和十七年二月二十五日第三種郵便物認可



食物の消化が悪く 食欲がなく、胃腸が弱いのは常習便秘の人に多いので  
強い胃腸にすることが便秘を救ふ早道です  
ビタミンBは獨特の解毒作用により便秘を整へます  
従つて左の効果あり  
常習便秘・消化不良・腸内異常醗酵・胃弱急性腸炎  
答兒・食欲不振

## 純良酵母 錠トウラス

本社製品  
子供用酵母錠  
森永トウラス錠  
純良酵母粉  
甘味七ヶ止錠  
森永バスチル  
森永外信錠  
森永ザルベ  
森永スタトース  
森永温布期



いさ下地市御へ宛本接直は郵のれ切品に店薬

社合公世日薬ニ本

# 常習便秘に

# 『文学界』1942年2月号

## 文学界

二月 號



甲鳥  
書林

「上呈報月」  
東京市神田區錦倉  
町七〇番地  
八六四八二一〇  
三六二  
六六  
三

歌集  
妻

川田 順著  
歌集「驚」以後の作を  
拵めて一費成る。妻は  
日本の妻であり、家庭  
を守る力である。心の  
内なるものへの讀へと  
ひそかなる感謝と追憶  
と、動き行く世の姿へ  
の鋭い反省と覺悟を叙し、  
各首は珠玉と輝く。  
B6・挿入 函二・八〇

近故  
刊

ゴッホの手紙  
郷 土井隆信譯 函二・五〇  
金史 長 函二・〇〇

わが  
日記

吉井 勇 新歌集  
北歌人吉井勇がその落  
久體に生活の寂心を日  
記に諸氏に贈られて久  
も心の寂境の歌人が詩  
られよ  
B6・横山大綱繪 函二・〇〇

向日葵

安騎東野科學隨筆  
B6・繪本 函二・三〇  
生化學の權威の著者が多年に  
渉つて各誌上に發表されてそ  
の都度問題視された貴重な文  
獻集である。文中の向日葵の  
如きは農村食糧問題又榮養糧  
とつて切實に論議され實行さ  
れつつある。因に著者安騎東  
野とは東大の宮本璋氏。  
大町文衛昆虫記  
B6・遊漢漫寫言 函二・五〇  
本書は昆虫研究の第一人者コ  
ホロギの博士大町文衛氏の多  
年の蘊蓄を傾倒された斯界の  
研究と、自然界に關する隨筆  
とを以てしたもので平易なる  
筆の中に無限の興趣が溢々と  
湧くのを感じる。

蟲人自然

遠方の人

水原秋櫻子著  
B6 挿入・森田沙羅繪 函二・三〇  
収録するは秋櫻子が最近の千  
餘句より厳選せる五百餘句  
題名の示すが如く、句惚ひた  
すらに澄み透り、藝の精緻に  
歩一步到達せる名匠の彫琢の  
句集である。著者又本句集に  
は絶大なる自負と愛着とを持  
つて上梓された。  
森山啓小説集  
B6・演漢漫寫言繪 函二・〇〇  
昨年度に於ける最も注目すべ  
き作品を次々に發表した森山  
啓の近集。どの作品中の人物  
も時代を正しく認識しその忠  
實な生活に堂々と生きこる  
これらの逞しく晦澁なき人生  
展開面は讀者をして思はず快  
哉を叫ばしむるであらう。

# 『文学界』1942年2月号



## 古 譚

中 島 敦

### 山 月 記

隴西の李徴は博學才顯、天寶の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃む所頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた。いくばくもなく官を退いた後は、故山、鏡略に歸臥し、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺さうとしたのである。しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を送うて苦しくなる。李徴は漸く焦燥に驅られて来た。この頃から其の容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ徒らに炯々として、曾て進士に登第した頃の豊頰の美少年の俤は、何處に求めやうもない。數年の後、貧窮

(138)

に堪へず、妻子の衣食のために遂に節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、之は、己の詩業に半ば絶望したためでもある。曾ての同輩は既に遙か高位に進み、彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかつた其の連中の下命を拜さねばならぬことが、往年の秀才李徴の自尊心を如何に傷けたかは、想像に難くない。彼は快々として樂します、狂悖の性は愈々抑へ難くなつた。一年の後、公用で旅に出、汝水のはとりに宿つた時、遂に發狂した。或夜半、急に顔色を變へて寢床から起上ると、何か譚の分らぬことを叫びつゝ其の儘下にとび下りて、闇の中へ駆出した。彼は二度と戻つて來なかつた。附近の山野を搜索しても、何の手掛りもない。その後李徴がどうなつたかを知る者は、誰もなかつた。

翌年、監察御史、陳郡の袁修といふ者、勅命を奉じて嶺南に使し、遂に商於の地に宿つた。次の朝未だ暗い中に出發しようとした所、驛吏が言ふことに、これから先の道に人喰虎が出る故、旅人は白晝でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、今少し待たれたが宜しいでせうと。袁修は、しかし、供廻りの多勢なのを待み、驛吏の言葉を斥けて、出發した。殘月の光をたよりに林中の草地を通つて行つた時、果して一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は、あはや袁修に躍りかかるかと思えたが、忽ち身を躡して、元の叢に隠れた。叢の中から人間の聲で「あぶない所だつた」と繰返し呟くのが聞えた。其の聲に袁修は聞き憶えがあつた。驚懼の中にも、彼は呶嗟に思ひあたつて、叫んだ。「其の聲は、我が友、李徴子ではないか？」袁修は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少かつた李徴にとつては、最も親しい友であつた。温和な袁修の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかつたためであらう。

叢の中からは、暫く返辭が無かつた。しのび泣きかと思はれる微かな聲が時々洩れるばかりである。ややつて、低い聲が答へた。「如何にも自分は隴西の李徴である」と。

袁修は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久瀾を叙した。そして、何故叢から出て來ないのかと問うた。李徴の聲が答へて言ふ。自分は今や異類の身となつてゐる。どうして、おめく〜と故人の前にあさましい姿をさらせようか。且つ又、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖厭厭の情を起させるに決つてゐるからだ。しかし、今、闕ら

(139)

# 『文学界』1942年2月号

ずも故人に遇ふことを得て、愧赧の念をも忘れる程に懐かしい。どうか、ほんの暫くでもいいから、我が醜悪な今の外形を厭はず、曾て君の友李徴であつた此の自分と話を交して呉れないだらうか。

後で考へれば不思議だつたが、其の時、袁修は、この超自然の怪異を、實に素直に受容れて、少しも怪まうとしなかつた。彼は部下に命じて行列の進行を止め、自分は叢の傍に立つて、見えざる聲と対談した。都の噂、舊友の消息、袁修が現在の地位、それに對する李徴の祝辭、青年時代に親しかつた者同志の、あの隔てのない語調で、それ等が語られた後、袁修は、李徴がどうして今の身となるに至つたかを訊ねた。草中の聲は次のやうに語つた。

今から一年程前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊つた夜のこと、一睡してから、ふと眼を覺ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでゐる。聲に應じて外へ出て見ると、聲は闇の中から頻りに自分を招く。覺えず、自分は聲を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を掘んで走つてゐた。何か身體中に力が充ち満ちたやうな感じで、軽々と岩石を跳び越えて行つた。氣が付くと、手先や腋のあたりにも毛を生じてゐるらしい。少し明るくなつてから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となつてゐた。自分は初め眼を信じなかつた。次に、之は夢に違ひないと考へた。夢の中で、之は夢だぞと知つてゐるやうな夢を、自分はそれ迄に見たことがあつたから。どうしても夢でないかと悟らねばならなかつた時、自分は茫然とした。さうして、懼れた。全く、どんな事でも起り得るのだと思つて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になつたのだらう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。自分は直ぐに死を想つた。しかし、其の時、眼の前を一匹の兎が駆け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。再び自分の中の人間が目を覺ました時、自分の口は兎の血に塗れ、あたりに兎の毛が散らばつてゐた。之が虎としての最初の経験であつた。それ以来今迄にどんな所行を續けて來たか、それは到底語るに忍びない。ただ、一日の中に必ず數時間は、人間の心が還つて來る。さういふ時には、曾ての日と同じく、人語も操れば、複雑な思考にも堪へ得るし、經書の章句をも誦することが出来る。その人間の心で、

(140)

虎としての己の殘虐な行のあとを見、己の運命をふりかへる時が、最も情なく、恐ろしく、憤らしい。しかし、その、人間にかへる數時間も、日を経るに従つて次第に短くなつて行く。今迄は、どうして虎などになつたかと怪しんでゐたのに、此の間ひよいと氣が付いて見たら、己はどうして以前、人間だつたのかと考へてゐた。之は恐ろしいことだ。今少し経ては、己の中の人間の心は、獸としての習慣の中にすつかり埋れて消えて了ふだらう。恰度、古い宮殿の礎が次第に土砂に埋没するやうに。さうすれば、しまひに己は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂ひ廻り、今日の様に途で君と出會つても故人と認めることなく、君を裂き喰うて何の悔も感じないだらう。一體、獸でも人間でも、もとは何か他のものだつたんだらう。初めはそれを憶えてゐたが、次第に忘れて了ひ、初めから今の形のものだつたと思ひ込んでゐるのではないか？ いや、そんな事はどうでもいい。己の中の人間の心がすつかり消えて了へば、恐らく、その方が、己はしあはせになれるだらう。なのに、己の中の人間は、その事を、此の上なく恐ろしく感じてるのだ。ああ、全く、どんなに、恐ろしく、哀しく、切なく思つてゐるだらう！ 己が人間だつた記憶のなくなることを、この氣持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上になつた者でなければ。所で、さうだ。己がすつかり人間でなくなつて了ふ前に、一つ頼んで置き度いことがある。

袁修は始め一行は、息をのんで、叢中の聲の語る不思議に聞入つてゐた。聲は續けて言ふ。

他でもない。自分は元來詩人として名を成す積りでゐた。しかも、業未だ成らざるに、この運命に立至つた。曾て作る所の詩數百篇、固より、まだ世に行はれてをらぬ。遺稿の所在も最早判らなくなつてゐるやう。所で、その中、今も尙記誦せるものが數十ある。之を我が爲に傳録して戴き度いのだ。何も、之に仍つて一人前の詩人面をしたのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂はせて迄自分が生涯それに執著した所のものを、一部なりとも後代に傳へないでは、死んでも死に切れないのだ。

袁修は部下に命じ、筆を執つて叢中の聲に隨つて書きとらせた。李徴の聲は叢の中から朗々と響いた。長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一讀して作者の才の非凡を思はせるものばかりである。しかし、袁修は感嘆しながらも

(141)

# 『文学界』1942年2月号

漠然と次の様に感じてゐた。成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑ひない。しかし、この儘では、第一流の作品となるのには、何處か（非常に微妙な點に於て）缺ける所があるのではないかと。

舊詩を吐き終つた李徴の聲は、突然調子を變へ、自らを嘲るが如くに言つた。

羞しいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、己は、己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれてゐる様子を、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たはつて見る夢にだも。嗤つて呉れ。詩人に成りこなつて虎になつた哀れな男を。（袁修は昔の青年李徴の自嘲辭を思出しながら、哀しく聞いてゐた。）さうだ。お笑ひ草ついでに、今の懷を即席の詩に述べて見ようか。この虎の中に、まだ、曾ての李徴が生きてゐるしるしに。

袁修は又下吏に命じて之を書きとらせた。その詩に言ふ。

偶因狂疾成殊類 災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵 當時聲跡共相高

我爲異物蓬茅下 君已乘軺氣勢豪

此夕溪山對明月 不成長嘯但成嗥

時に、殘月、光冷やかに、白露は地に滋く、樹間を渡る冷風は既に曉の近きを告げてゐた。人々は最早、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄倖を嘆じた。李徴の聲は再び續ける。

何故こんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、考へやうに依れば、思ひ當ることが全然ないでもない。人間であつた時、己は努めて人との交を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといつた。實は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかつた。勿論、曾ての郷黨の秀才だつた自分に、自尊心が無かつたとは云はない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいふべきものであつた。己は詩によつて名を成さうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めた詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた。かといつて、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心の所爲である。己の珠に非ざることを

(142)

惧れるが故に、敢て刻苦して磨かうとせず、又、己の珠なるべきを半ば信するが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかつた。己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙懣とによつて益と己の内なる臆病な自尊心を飼ひふとらせる結果になつた。人間は誰でも猛獸使であり、その猛獸に當るのが、各人の性情だといふ。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獸だつた。虎だつたのだ。己が己を損ひ、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形を斯くの如く、内心にふさはしいものに變へて了つたのだ。今思へば、全く、己は、己の有つてゐた僅かばかりの才能を空費して了つた譯だ。人生は何事をも爲さぬには餘りに長いが、何事かを爲すには餘りに短いなど口先ばかりの警句を弄しながら、事實は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭ふ怠惰とが己の凡てだつたのだ。己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを專一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者が幾らでもあるのだ。虎と成り果てた今、己は漸くそれに氣が付いた。それを思ふと、己は今も胸を灼かれるやうな悔を感じる。己には最早人間としての生活は出来ない。たとへ、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作つたにしろ、どういふ手段で發表できよう。まして、己の頭は毎日に虎に近づいて行く。どうすればいいのだ。己の空費された過去は？

己は堪らなくなる。さういふ時、己は、向うの山の頂の巖に上り、空谷に向つて吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴へたいのだ。己は昨夕も、彼處で月に向つて咆えた。誰かに此の苦しみが分つて貰へないかと。しかし、獸どもは己の聲を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂つて、哮つてゐるとしか考へない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の氣持を分つて呉れる者はない。恰度、人間だつた頃、己の傷つき易い内心を誰も理解して呉れなかつたやうに。己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。

漸く四邊の暗さが薄らいで来た。木の間に傳つて、何處からか、隅角が哀しげに響き始めた。

最早、別れを告げねばならぬ。醉はねばならぬ時が、虎に還らねばならぬ時が、近づいたからと、李徴の聲が言つた。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。彼等は未だ鏡略にゐる。固より、己の運命に就いては知る筈がない。君が南から歸つたら、己は既に死んだと彼等に告げて貰へないだらうか。決して今日の

(143)

# 『文学界』1942年2月号

ことだけは明かさないで欲しい。厚かましいお願だが、彼等の孤弱を憐れんで、今後とも遺棄に飢凍することのないやうにはからつて救けるならば、自分にとつて、恩俸、之に過ぎたるは莫い。

言終つて、叢中から慟哭の聲が聞えた。袁も亦涙を泛べ、欣んで李徴の意に副ひ度い旨を答へた。李徴の聲は併し忽ち又先刻の自嘲的な調子に戻つて、言つた。

本當は、先づ、此の事の方を先にお願ひすべきだつたのだ、己が人間だつたなら。飢寒凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を氣にかけてゐる様な男だから、こんな獸に身を墮すのだ。

さうして、附加へて言ふことに、袁儂が嶺南からの歸途には決して此の途を通らないで欲しい、其の時には自分が醉つてゐる故人を認めずに襲ひかかるかも知れないから。又、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上つたら、此方を振りかへつて見て貰ひ度い。自分は今の姿をもう一度お目に掛けよう。勇に誇らうとしてではない。我が醜惡な姿を示して、以て、再び此處を過ぎて自分に會はうとの氣持を君に起させない爲である。

袁儂は叢に向つて、怒ろに別れの言葉を述べ、馬に上つた。叢の中からは、又、堆へ得ざるが如き悲泣の聲が洩れた。袁儂も幾度か叢を振り返りながら、涙の中に出發した。

一行が丘の上についた時、彼等は、言はれた通りに振返つて、先程の林間の草地を眺めた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く光を失つた月を仰いで、二聲三聲咆哮したかと思ふと、又、元の叢に躍り入つて、再び其の姿を見なかつた。

## 文字 禍

文字の靈などといふものが、一體、あるものか、どうか。

アッシリヤ人は無数の精靈を知つてゐる。夜、闇の中を跳梁するリル、その雌のリリツ、疫病をふり撒くナムタル、死者の靈エティム、誘拐者ラバス等、數知れぬ惡靈共がアッシリヤの空に充ち満ちてゐる。しかし、文字の精靈に就いては、まだ誰も聞いたことがない。

其の頃——といふのは、アッシュル・パニ・アバリ大王の治世第二十一年目の頃だが——ニネエの宮廷に妙な噂があつた。毎夜、圖書館の間の中で、ひそ／＼と怪しい話し聲がするといふ。王兄シヤマシユ・シムム・ウキンの謀叛がパピロンの落城で漸く鎮まつたばかりのこととて、何か又、不逞の徒の陰謀ではないかと探つて見たが、それらしい様子もない。どうして何かの精靈どもの話し聲に違ひない。最近に王の前で處刑されたパピロンからの俘囚共の死靈の聲だらうといふ者もあつたが、それが本當でないことは誰にも判る。千に餘るパピロンの俘囚は悉く舌を抜いて殺され、その舌を集めた所、小さな築山が出来たのは、誰知らぬ者のない事實である。舌の無い死靈に、しやべる譯がない。星占や羊肝卜で空しく探索した後、之はどうしても、書物共或ひは文字共の話し聲と考へるより外はなくなつた。たゞ、文字の靈(といふものが在るとして)とは如何なる性質をもつものか、それが皆目判らない。アッシュル・パニ・アバリ大王は巨眼縮髮の老博士ナブ・アヘ・エリバを召して、此の未知の精靈に就いての研究を命じ給うた。その日以来、ナブ・アヘ・エリバ博士は、日毎問題の圖書館(それは、其の後二百年にして地下に埋没し、更に後二千三百年にして偶然發掘される運命をもつものであるが)に通つて萬巻の書に目をさらしつゝ研鑽に耽つた。兩河地方では埃及と違つて紙草を産しない。人々は、粘土の板に硬筆を以て複雑な楔形の符號を彫りつけてをった。書物は瓦であり、圖書館は瀬戸物屋の倉庫に似てゐた。老博士の卓子(その脚には、本物の獅子の足が、爪さへ其の儘に使はれてゐる)の上には、毎日、繁々たる瓦の山がうづだかく積まれた。其等重畳ある古知識の中から、彼は、文字の靈に就いての説を見出さうとしたが、無駄であつた。文字はボルシッパなるナブウの神の司り給ふ所とより外には何事も記されてゐないのである。文字に靈ありや無しやを、彼は自力で解決せねばならぬ。博士は書物を離れ、唯一つの文字を前に、終日それと睨めつこをして過した。卜者は羊の肝臓を凝視することによつて凡ての事象を直観す

# 『文学界』1942年2月号

る。彼も之に倣つて、凝視と靜観とによつて眞實を見出さうとしたのである。その中に、をかきな事が起つた。一つの文字を長く見詰めてゐる中に、何時しか其の文字が解體して、意味の無い一つ一つの線の交錯としか見えなくなつて来る。單なる線の集りが、何故、さういふ音とさういふ意味とを有つことが出来るのか、どうしても解らなくなつて来る。老儒ナブ・ア・エリバは、生れて初めて此の不思議な事實を發見して、驚いた。今迄七十年の間當然と思つて看過してゐたことが、決して當然でも必然でもない。彼は眼から鱗の落ちた思がした。單なるバラ／＼の線に、一定の音と一定の意味とを有たせるものは、何か？　こゝ迄思ひ到つた時、老博士は躊躇なく、文字の靈の存在を認めた。魂によつて統べられない手・脚・頭・爪・腹等が、人間ではないやうに、一つの靈が之を統べるのでなくて、どうして單なる線の集合が、音と意味とを有つことが出来るか。

この發見を手初めに、今迄知られなかつた文字の靈の性質が次第に少しづつ判つて来た。文字の精靈の数は、地上の事物の數程多い、文字の精は野鼠のやうに仔を産んで殖える。

ナブ・ア・エリバはニネエの街中を歩き廻つて、最近に文字を覺えた人々をつかまへては、根氣よく一々尋ねた。文字を知る以前に比べて、何か變つたやうな所はないかと。之によつて、文字の靈の人間に對する作用を明らかにしようといふのである。さて、斯うして、をかきな統計が出来上つた。それに依れば、文字を覺えてから急に論を捕るのが下手になつた者、眼に埃が餘計はいるやうになつた者、今迄良く見えた空の鷺の姿が見えなくなつた者、空の色が以前程碧くなくなつたといふ者などが、壓倒的に多い。「文字ノ精ガ人間ノ眼ヲ喰ヒアラスコト、猶、蛆虫ガ胡桃ノ固キ殻ヲ穿テテ、中ノ實ヲ巧ニ喰ヒツクスガ如シ」と、ナブ・ア・エリバは、新しい粘土の備忘録に誌した。文字を覺えて以來、咳が出始めたといふ者、くしゃみやみが出るやうになつて困るといふ者、しやつくりが良く出るやうになつた者、下痢するやうになつた者なども、かなりの數に上る。「文字ノ精、人間ノ鼻・咽喉・腹等ヲモ犯スモノノ如シ」と、老博士は又誌した。文字を覺えてから、俄かに頭髮の薄くなつた者もある。脚の弱くなつた者、手足の顫へるやうになつた者、顎がはづれ易くなつた者もある。しかし、ナブ・ア・エリバは最後に斯う書かねばならなかつ

た。「文字ノ害タテ、人間ノ頭腦ヲ犯シ、精神ヲ痲痺セシムルニ至ツテ、スナハチ極マル」文字を覺える以前に比べて、職人は腕が鈍り、戰士は臆病になり、獵師は獅子を射損ふことが多くなつた。之は統計の明らかに示す所である。文字に親しむやうになつてから、女を抱いても一向樂しうなくなつたといふ訴へもあつた。もつとも、斯う言出したのは、七十歳を越した老人であるから、之は文字の所爲ではないかも知れぬ。ナブ・ア・エリバは斯う考へた。埃及人は、ある物の影を、其の物の魂の一部と見做してゐるやうだが、文字は、その影のやうなものではないのか。獅子といふ字は、本物の獅子の影ではないのか。それで、獅子といふ字を覺えた獵師は、本物の獅子の代りに獅子の影を狙ひ、女といふ字を覺えた男は、本物の女の代りに女の影を抱くやうになるのではないのか。文字の無かつた昔、ビル・ナビシユテムの洪水以前には、獣びも智慧もみんな直接に人間の中にはいつて来た。今は、文字の薄被をかぶつた獣びの影と智慧の影としか、我々は知らない。近頃人々は物憶えが悪くなつた。之も文字の精の惡戯である。人々は、最早、書きとめて置かなければ、何一つ憶えることが出来ない。着物を着るやうになつて、人間の皮膚が弱く醜くなつた。乗物が發明されて、人間の脚が弱く醜くなつた。文字が普及して、人々の頭は、最早、働かなくなつたのである。

ナブ・ア・エリバは、或る書物狂の老人を知つてゐる。其の老人は、博學なナブ・ア・エリバよりも更に博學である。彼は、スメリヤ語やアラマヤ語ばかりでなく、紙草や羊皮紙に誌された埃及文字まですら／＼と讀む。凡そ文字になつた古代のことで、彼の知らぬことはない。彼は、ツクルチ・ニブ一世王の治世第何年目の何月何日の天候まで知つてゐる。しかし、今日の天氣は晴か曇か、氣が付かない。彼は、少女サビツがギルガメシを慰めた言葉をも讀んじてゐる。しかし、息子をなくした隣人を何と言つて慰めてよいか、知らない。彼は、アダッド・ニラリ王の後、サンムラマツがどんな衣裳を好んだかも知つてゐる。しかし、彼自身がどんな衣服を着てゐるか、まるで氣が付いてゐない。何と彼は文字と書物とを愛したであらう！　讀み、讀んじ、愛撫するだけではあきたらず、それを愛するの餘りに、彼は、ギルガメシ傳説の最古版の粘土板を嚙碎き、水に溶かして飲んで了つたことがある。文

# 『文学界』1942年2月号

字の精は彼の眼を容赦なく喰ひ荒し、彼は、ひどい近眼である。餘り眼を近づけて書物はかり讀んでゐるので、彼の驚形の鼻の先は、粘土板と擦れ合つて固い脂肪が出来てゐる。文字の精は、又、彼の脊骨をも蝕み、彼は、臍に顎のくつつきさうな僂僂である。しかし、彼は、恐らく自分が僂僂であることを知らないであらう、僂僂といふ字なら、彼は、五つの異つた國の字で書くことが出来るのだが。ナブ・ア・エリバ博士は、此の男を、文字の精靈の犠牲者の第一に数へた。たゞ、斯うした外觀の惨めさに拘はらず、此の老人は、實に——全く羨ましい程——何時も幸福さうに見える。之が不審といへば、不審だつたが、ナブ・ア・エリバは、それも文字の靈の媚薬の如き狡猾な魔力の所爲と見做した。

偶々アシユル・パニ・アバル大王が病に罹られた。侍醫のアラッド・ナナは、此の病輕からずと見て、大王の御衣裳を借り、自ら之をまとうて、アッシリヤ王に扮した。之によつて、死神エレシユキガルの眼を欺き、病を大王から己の身に轉じようといふのである。此の古來の醫家の常法に對して、青年の一部には、不信の眼を向ける者がある。之は明らかに不合理だ、エレシユキガル神ともあらうものが、あんな子供騙しの計に欺かれる筈があるか、と、彼等は言ふ。碩學ナブ・ア・エリバは之を聞いて厭な顔をした。青年等の如く、何事にも辻褄を合せたがることの中には、何かしらをかしな所がある。全身垢まみれの男が、一ヶ所だけ、例へば足の爪先だけ、無闇に美しく飾つてゐるやうな、さういふをかしな所が。彼等は、神祕の靈の中に於ける人間の地位をわきまへぬのぢや。老博士は淺薄な合理主義を一種の病と考へた。そして、其の病をはやらせたものは、疑もなく、文字の精靈である。

或日若い歴史家(或ひは宮廷の記録係)のイシュディ・ナブが訪ねて來て、老博士に言つた。歴史とは何ぞや?と。老博士が呆れた顔をしてゐるのを見て、若い歴史家は説明を加へた。先頃のバビロン王シャマシュ・シム・ウキンの最期について色々な説がある。自ら火に投じたことだけは確かだが、最後の一月程の間、絶望の餘り、言語に絶した淫蕩の生活を送つたといふものもあれば、毎日ひたすら潔齋してシャマシュ神に祈り續けたといふものもある。第一の妃唯一人と共に火に入つたといふ説もあれば、數百の婢妾を薪の火に投じてから自分も火に入つたといふ

説もある。何しろ文字通り煙になつたこととて、どれが正しいのか一向見當がつかない。近々、大王は其等の中の一つを選んで、自分にそれを記録するやう命じ給ふであらう。これはほんの一例だが、歴史とは之でいふのであらうか。賢明な老博士が賢明な沈黙を守つてゐるのを見て、若い歴史家は、次の様な形に問を變へた。歴史とは、昔、在つた事柄をいふのであらうか? それとも、粘土板の文字をいふのであらうか?

獅子狩と、獅子狩の浮彫とを混同してゐるやうな所が此の間の中にある。博士はそれを感じたが、はつきり口で言へないので、次の様に答へた。歴史とは、昔在つた事柄で、且つ粘土板に誌されたものである。この二つは同じことではないか。

書洩らしは? と歴史家が聞く。

書洩らし? 冗談ではない、書かれなかつた事は、無かつた事ぢや。芽の出ぬ種子は、結局初めから無かつたのぢやわい。歴史とはな、この粘土板のことぢや。

若い歴史家は情なさうな顔をして、指し示された瓦を見た。それは、此の國最大の歴史家ナブ・シャリム・シユメ誌す所のサルゴン王ハルディア征討行の一枚である。話しながら博士の吐き棄てた柘榴の種子が其の表面に汚らしくくつついてゐる。

ボルシッパなる明智の神ナブウの召使ひ給ふ文字の精靈共の恐しい力を、イシュディ・ナブよ、君はまだ知らぬと見えるな。文字の精共が、一度或る事柄を捉へて、之を己の姿で現すとすると、その事柄は最早、不滅の生命を得るのぢや。反對に、文字の精の力ある手に觸れなかつたものは、如何なるものも、その存在を失はねばならぬ。太古以來のアメ・エンリルの書に書上げられてゐない星は、何故に存在せぬか? それは、彼等がアメ・エンリルの書に文字として載せられなかつたからぢや。大マルヅック星(木星)が天界の牧羊者(オリオン)の境を犯せば神々の怒が降るのも、月輪の上部に蝕が現れればアモル人が禍を蒙るのも、皆、古書に文字として誌されてあればこそぢや。古代スメリヤ人が馬といふ獸を知らなんだのも、彼等の間に馬といふ字が無かつたからぢや。此の文字の精靈の



# 『文学界』1942年2月号

白水社

## 逸獨現代 國民文學

第一卷  
グリーゼ作

### 怒濤

園松幸二譯

る意志と祖國への愛。ドイツ民族の高貴にして前烈なる魂が、こゝに雄動闊達の筆致を以て展開されてゆく。現ナチス文壇の巨匠たる著者が、大作『冬』を公刊してから六年、いよいよ國熱の絶頂に達して四十六歳（一九三五年）の時、『ドイツの青年に獻ぐる』絶大の地獄を以て發表した民族と土の「神話」である。

定價二圓・送料十圓

東京神田區神保町下・振替東京三三三二八

### 逸獨人のこころ

相良守著  
價二・五〇  
送料一四

世界往來の編織人、複雑にして含みの多い逸獨人のこころを、特にその表はれとしての文學を、著者の豊富な興味深く開りつくされた。

吉江喬松全集 第六卷

### 自然美論 散文詩

價三・八〇  
送料三三

### 佛蘭西「語りもの」文藝の研究

佐藤輝夫著 價二・五〇 送料一四

### 源氏物語の精神史的研究

わが古典のうち『源氏物語』ほど多くの問題を多く含むものはない。この先進文學に對する著者の鋭敏な研究は前人未踏の成果を得た。古典に對する所研究こそ、新文化へのよりよき基礎である。

関みさを著 價二・八〇 送料一四



## 文学界 後記

本誌は慣例によれば池谷賞の授賞

發表がある筈だが、審議審査委員会を開き、その時舉つた一二の候補を更に数名の人に委嘱して再検討した揚句、今回は推薦者なしといふことに決定した。

池谷賞には我々同人一方ならぬ關心を持つてゐる。従來の受賞者が皆現在優れた文學活動をしてゐる所を見ても、偶々優秀作を書いた人にゆきずりに授賞するといふのでなく、作家の獨自な資性と作品の魅力とが互に裏切つてゐないやうな、正確さを鑑別の上に期したいと思つてゐる。賞の傳統を保持するため、それだけの意味で嚴選するのであつて、あとはその作家の傾向や種別に何のこだわりもなく、廣く公平に眼を働かせてゐるつもりである。

新年號に讀者カードを挿入した所、非常に眞摯な投書が深山來たことを感謝してゐる。全くの所、叱責は聞はぬが、不眞面目なものは一つもない。それに他の同じ企てと比べて驚くべき知的向上、並にそれに伴ふ年齢の向上だ。私は豫期以上勵まされる所があり、それに編輯プラン其他について教へられる所があつた。私は心して期待に添ふことを期するつもりだ。

此の正月の暇には可なりの原稿を讀んで過した。本誌並びにその後でその若干を紹介したいと思つてゐる。然し争へぬことは創作精神の低下だ。それは、文藝時評、文藝授賞、雑誌編輯、此の三つの私の仕事の結果の否定し得ぬ感想だ。丁度近頃店に買ひたい品物が手薄になつてゆくやうに、いゝ作品が少なくなつてゆく。原因は戦争に違ひないのだが、さて戦争が果してどう影響してゐるのか、知りたいものだ。

尾崎喜八氏の詩は、過日文學者愛國大會の席上で作者が自詠して流場の涙を誘つたもの當日武者小路氏の演説と共に白眉であつたことを附記しておく。(河上徹太郎)

定	一ヶ月 六十錢(送料銀五圓)
定	六ヶ月 三圓六〇錢(送料銀五圓)
定	一ケ年 七圓三〇錢(送料銀五圓)
増刊	増大號は定額送料共不用願ひます
御送金	は成る可く振替を御利用願ひ申上ます
御代引	の御註文は勝手から報次第社員まで致さず
定	價六十錢(送料銀五圓)
印刷所	東京市小川區板橋町一〇八
印刷所	共同印刷株式會社
東京市	神田區板橋町一九
配給元	日本出版配給株式會社

# Digital Scholarly Editions

著作権等の都合により、  
ここに挿入されていた画像を削除しました

Introduction to Digital Scholarly Editions  
<https://www.youtube.com/watch?v=6gMoRqiAoRo>

著作権等の都合により、  
ここに挿入されていた画像を削除しました

01.01 - Why Do We Encode?  
[https://www.youtube.com/watch?v=R0ncl\\_rr1z4](https://www.youtube.com/watch?v=R0ncl_rr1z4)

著作権等の都合により、  
ここに挿入されていた画像を削除しました

02.02 - Transcription: Pages and Facsimile  
<https://www.youtube.com/watch?v=g15Baa85ZK4>

# 宋本論語注疏

## 論語註疏卷第一

### 學而第一

#### 何晏集解

#### 邢昺疏

**疏**

正義曰自此至堯曰是魯論語二十篇之名及第次也當弟子論撰之時以論語為此書之大名學而以下為當篇

之小目其篇中所載各記舊聞意及則言不為義例或以類相從此篇論君子孝悌仁人忠信道國之法主友之規聞政在乎行德由禮貴於用和無求安飽以好學能自切磋而樂道皆入行之大者故為諸篇之先既以學為章首遂以名篇言人必須學也為政以下諸篇所次先儒不無意焉當篇各言其指此不煩說第訓次也一數之始也言此篇於次當一也

子曰學而時習之不亦說乎

馬曰子者男子之通稱謂孔子也王曰時

學以時誦習之誦習以時學無廢業所以為說擇

**釋**

說音悅稱尺證切擇音亦

有朋自遠

方來不亦樂乎

句曰同門曰朋

**釋**

有朋薩氏字或作友非然音洛譙周云悅深而樂淺

云自內曰悅自外曰樂

人不知而不愠不亦君子乎

愠怒也

所不知君子不怒

**疏**

子曰學而至君子乎正義曰此章勸人學為君子也子者古人稱師曰子子男子之通稱此言子

者謂孔子也曰者說文云詞也從口乙聲亦象口烝出也然則曰者發語詞也以此下是孔子之語故以子曰冠之或言孔子曰者

以記非一人各以意載無義例也白虎通云學者覺也覺悟所未知也孔子曰學者而能以時誦習其經業使無廢落不亦說擇乎

學業稍成能招朋友有同門之朋從遠方而來與已講習不亦樂乎既有成德凡人不知而不怒之不亦君子乎言誠君子也君子

之行非一此其一行耳故云亦也注馬曰子者至說擇正義曰云子者男子之通稱者經傳凡敵者相謂皆言吾子或直言子

稱師亦曰子是子者男子有德之通稱也云謂孔子嫌為他師故辨之公羊傳曰子沈子曰何休云沈子稱子冠氏士者著其

# 書物と知

## 書物の学

- 【humanity】OED
- 【人文】日本国語大辞典 漢語大詞典
- 知識人＝読書人

## 書物の保存と利用

- 専有→公有→共有

## 構造体としての書物

- マテリアルとテキスト

## 読書と書記

- 身体化される知
- 物質化される知
- 断片となって浮遊する知

# 朱熹の読書法

## 書物

今人所以讀書苟簡者，緣書皆有印本多了。如古人皆用竹簡，除非大段有力底人方做得。若一介之士，如何置。所以後漢吳恢欲殺青以寫漢書，其吳祐諫曰：「此書若成，則載之車兩。昔馬援以薏苡興謗，王陽以衣囊徼名，正此謂也。」如黃霸在獄中從夏侯勝受書，凡再踰冬而後傳。蓋古人無本，除非首尾熟背得方得。至於講誦者，也是都背得，然後從師受學。[…]今人連寫也自厭煩了，所以讀書苟簡。

『朱子語類』卷十

## 玩味

讀書著意玩味，方見得義理從文字中迸出。

『朱子語類』卷十

大凡讀書，須是熟讀。熟讀了，自精熟；精熟後，理自見得。如喫果子一般，劈頭方咬開，未見滋味，便喫了。須是細嚼教爛，則滋味自出，方始識得這箇是甜是苦是甘是辛，始為知味。

『朱子語類』卷十

# 朱熹の読書法

## 口中読

大凡讀書，且要讀，不可只管思。口中讀，則心中閑，而義理自出。某之始學，亦如是爾，更無別法。

『朱子語類』卷十一

## 体察

學者讀書，須要斂身正坐，緩視微吟，虛心涵泳，切己省察。

『朱子語類』卷十一

<http://hanji.sinica.edu.tw>

# デジタル化

## digitize 数字化

- あらゆるものを対象に
  - 目録／画像／テキスト
  - 国会図書館オンライン
- **何が可能になったのか**
  - 処理・分析
  - 複製・共有
  - モノから数字へ
  - 日常の手法

# 日常の手法

## 生態学

- 発端: あるweb記事
- 調べてみる:
  - 日本国語大辞典【生態学】【生態】
  - 日本大百科全書【生態学】
  - 世界大百科事典【生態学】
  - 漢語大詞典【生態】

# 杜甫「曉發公安」

國學大師  
http://siku.guoxuedashi.com/wyg/WYG1070/WYG1070-0860c.png

欽定四庫全書

杜詩詳註  
卷二十二

大

侯詩花葉正低昂  
趙曰隨類影隨其所類而呈影也  
攀虞祈禮表隨類合之  
蓋注揚朱泣岐路謂其可南  
可北也  
古詩風濤  
暮不止幾日到瀟湘

### 曉發公安

原注數月愁息此縣  
陸游入蜀記公  
移居公安詩水烟通徑草秋露接園葵

而留別太易沙門詩沙邨白雪仍含凍江縣紅梅  
已放春則以是秋至此暮冬始去其曰數月愁息  
蓋謂此也  
黃鶴注此大雁  
三年冬自公安往岳陽時作

### 北城擊柝復

扶又切

欲罷東方明星亦不遲隣雞野哭如

### 昨日物色生

一云生

能幾時舟楫眇然自此去江湖遠

### 適無前期出門轉眄已陳跡藥餌扶吾隨所之

上四曉景數流

光易逝下四發舟傷行跡莫定  
杜律有語承意承之  
法不遲承欲罷幾時承如昨此句承法也  
隣雞承擊柝  
以所聞言物色承明星以所見言此意承法也  
物色  
指物生態指人陳迹指公安之地  
詩東有啟明西有  
長庚注曰旦出謂明星為啟明日既入謂明星為長庚  
晉傳玄詩東方大明星光景照十里  
顏延之詩日暮  
行樂歸物色桑榆時  
樂府滿歌行居世詎能幾時  
劉恢傳悅仰之間已為陳迹  
謝靈運詩藥餌情所止  
王嗣爽曰七律之變至此而極妙亦至此而極真此  
山谷所云不煩繩削而自合者蓋夔州以後詩也  
唐人作拗體律詩平仄多有失粘處明季蕭雲從作  
杜律細平仄用轉音改拗從順雖考證詳洽但恐多  
此轉折耳如此章反聲七字改作平聲欲字音迂揚  
雄羽獵賦壯士慷慨殊響別趨東西南北騁勢奔欲  
桂詩五律初月首句光細死欲上可證也  
罷字即疲  
叶逢在沈氏四支韻史記漢與楚相距士卒罷弊左

欽定四庫全書

杜詩詳註  
卷二十二

九



統ニ又本世紀ノ中央千八百五十九年チヤールス、ダーウキン氏ノ進化論始メテ世ニ出デ、以來一般生物ニ於ケル生態學上ノ研究其端緒ヲ開キ、該方面ニ於テ種々ノ觀察想説ヲ發表シ、植物ノ發育并ビニ生殖上ニ於ケル外圍ノ關係ヲ明ラカニスルニ至レリ、殊ニ熱帶寒帶高山、砂漠ノ如キ地方ニアリテハ所生植物帯ノ状態頗ブル暖帶地方ノモノト其觀ヲ異ニシ植物體ノ形態及ビ生理上特異ノ顯象多ク、研究ノ好材料ニ富メルヲ以テ、此等ノ場處ニ到リテ探究スルモノ多ク、隨テ斬新ノ事實日ニ多キヲ加フルトナレリ、此等ノ研究所中、就中ジャバ島ホイテンツォルグ植物園、印度セイロン島ベラデニア植物園(第一版)ノ如キハ共ニ熱帶地方ニ位シ、植

物富饒ニシテ研究ノ材料ニ富ムノミナラズ園内實驗ノ便最モ宜シキヲ以テ、現今世界各國植物學者ノ特ニ該園ニ到リテ攻究スルモノ多ク、隨テ植物生態學上重要ナル發見ヲナセルモノ尠少ナラズ、

植物學分科 現時ノ純正植物學ニハ左ノ四大分科アリ、

- 第一 植物形態學 (Morphological Botany) 植物體外部ノ形態及ビ内部ノ構造ヲ研究スルモノニシテ前者ハ特ニ之レヲ機官學 (Organography) ト云ヒ、後者ハ之レヲ解剖學 (Anatomy) ト云フ、而シテ後者中殊ニ細胞ニ就テ攻究スルモノニハ細胞學 (Cytology) ノ名稱アリ、
- 第二 植物生理學 (Physiological Botany) 植物體ニ於ケル生理現象及ビ其由テ起ル所以ヲ攻究スルモノナリ、
- 第三 植物分類學 (Systematic Botany) 現今存在セル植物及ビ古代ニ在リテ生存セルモノ(化石植物)ヲ總括分類シ其相互ノ親緣系統ヲ攻究シ、且ツ其分布ノ状態ヲ論ズルモノナリ、
- 第四 植物生態學 (Ecological Botany or Biology of Plants) 植物生活ノ状態ニ就テ汎

第一回 序論 植物學分科

二七

第一回 序論 植物學分科

二八

ク攻究スルモノニシテ、殊ニ其外圍トノ關係ヲ明ラカニスルモノナリ、此他、植物學ヲ應用セルモノ少ナカラズ、農業植物學、山林植物學、藥用植物學、園藝植物學等はレナリ、

# 『植物学講義』改版訂正四版 1901

国立国会図書館デジタルコレクション  
『植物学講義』1899  
info.ndljp/pid/832442  
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/832441

## 布ノ状態ヲ論ズルモノナリ、 第四植物生態學 (Ecological Botany or Biophy of Plants)

植物生活ノ状態ニ就テ汎ク  
ク攻究スルモノニシテ、殊ニ其外圍トノ關係ヲ明ラカニスルモノナリ、  
此他植物學ヲ應用セルモノ、少ナカラズ、農業植物學、山林植物學、藥用植物學、園藝  
植物學等是レナリ、

生態學ノ意義 純正植物學ノ四大分科中、形態生理分類ノ三科ハ古來已ニ發達  
セルモノニシテ其意義判然タレドモ、生態學ニ至リテハ最近ノ創成ニカ、リ、其語  
稱ノ來歴并ニ生理學トノ區別ニ就テ往々分明ヲ缺クノ嫌ナシトセズ、依テ左ニ此  
等ノ諸點ニ就テ説述スルトコロアラントス、

抑モ、生態學ナル學語ハ予ガ去ル明治廿八年始メテ獨語ノ *Biologie* 又ハ *Écologie* ニ  
充テタル譯稱ナルガ、今日ニテハ次第ニ生理、形態等ノ語稱ト共ニ通用スルニ至レ  
リ、蓋シ獨語ノ *Biologie* ハ特殊ノ意義ヲ有シ、生物ノ生活上凡百ノ状態ニ就キ攻究ス  
ルノ學ヲ稱スルモノニシテ、彼ノ英語ニ於ケル *Biology* (生物學トハ全ク其意味ヲ  
異ニスルモノナリ、斯ク同一語原ヲ有スル學語ガ國土ニヨリ異様ニ用ヒラレ往々

混雜ノ嫌アルヲ以テ、或ル學者(ヘッケル氏ノ如キハ *Lebenslehre* ナル語ヲ充テ、他學  
者ハ亦更ラニ *Éthologie* ノ語稱ヲ命ジタルモノアリ、此等ノ新稱中、前者ハ次第ニ探  
用セラル、ニ至リタレドモ、而カモ尙ホ *Logie* ナル原語ハ今日依然トシテ通用ス  
ルヲ見ル、

生態學攻究ノ目的ハ前述ノ如ク生物ノ生活ニ關スル凡百ノ状態ヲ明ラカニス  
ルモノニシテ、例セバ外圍適應、遺傳變化、自然分布ノ如キ是レナリ、故ニ之レヲ彼ノ  
生理學攻究ノ目的ニ比スレバ判然タル區別アリトス、即チ後者ニ於テハ生活上ノ  
諸現象ヲ分析シテ一々諸要素ノ動作ヲ審ニシ、又故ラニ此等ノ要素ヲ働カシメ以  
テ其植物體ニ起レル變狀ヲ觀察シ、其結果ヲ性質的及ビ數量的ニ論究スルニアリ、  
例セバ今根ガ地中ニ入りテ生長スルノ現象ニ就キテ其原理ヲ生理的ニ攻究セン  
ト欲セバ、彼ノ引力、日光、温熱、水濕、養料、觸接力等ノ諸要素ヲ單獨ニ根ニ働カシメ、以  
テ該機官ノ向地性、向日性、向熱性、向水性、向化性、向觸性等ノ比較的強度ヲ計リ、之レ  
ヲ自然ノ状態ニ考及シ、其原因並ニ副因ヲ發見スルニアルガ如シ、然ルニ、生態學的  
研究ハ全ク之レニ反シ、種々ノ事實ヲ觀察シテ、思考ノ資料ニ供シ以テ一ノ想説ヲ

# - 矢澤米三郎, 沢田銚義『昆虫生態学』1903

聲を弄して呼ぶものあり其千態萬狀なる一々得て之を悉し難し。斯る昆虫の多數は、親しく之を観察するに及びて、各其境遇に適應せる形質を具へ、其軀を保護するに足れる色采を有し、其類を惹くべき音聲と香氣とを放ち、其敵を防ぐべき口器と武器とを有し、其子孫を蕃殖すべき天性を稟け、其食物を攝取すべき感覺を有せるを知るべし。此等の生態を研究し、其軀形及構造の相異なる所以、其性質習慣の相關する所以、其食物と口器との關係、其擬態を爲せる狀、其保護色を有する理を探り、更に其歩を進めて自然に於ける淘汰の法則、生存競争の原則に論及せば、宇宙間に存する複雑なる生活状態の一斑を伺ふに足るべく、自然に於ける有機的生活の梗概を察すべく、之を推擴して人生諸般の倫理的關係に聯想すべく、人生に對する利害を知るを得べく、又幽微なる美的感情を振作することを得べし。此見解を以て自然を観察し、昆虫を研究せんとせば、勢其個軀の記載を以て満足すべからず必ずや、其境遇と共に之を説述せんことを要す。予輩は章を逐ひて卑近にして重要なる實例を選び、其研究の方法を説き、此天巧の神秘を探らんと欲す。

昆虫生態学

緒論

仰いて蒼穹を望み、上下且急且緩、紗羽日光を反射するものは、蜻蛉なり、俯して地表を察すれば、誰々高低且斷且續、紳間妙音を弄するものは、蠶斯なり、森林の蔚然たる、蛄、蝻之を蝕し、蟬、聲耳を劈くあり、禾、穀の穰々たる、蟲、蠹之を斃し、螟、虫、稈に潜むあり、清流、涓々たる、邊、石、下、蝨、爾として、細枝を纏ふあり、砂、礫、磊々たる、處、土、色、髣髴として、害敵を免るるあり、果、實、正に熟するや、益、虫、之を穿ち、蒴、藥、將に伸びんとするや、蚜、虫、之を吮ふ、百、花、庭、園に笑ひて、蝴、蝶、去、來し、塵、芥、圃、間に堆くして、螻、蛄、遠く遁る。金、鳥、西、山に沈みて、夜、色、稍く加はるに及び、螢、火の闇を縫ひて、飛ぶものあり、鈴、虫の

澤田銚義 矢澤米三郎 合著

## - 蔵書印「春翠文庫」

国立国会図書館デジタルコレクション  
 矢澤米三郎, 沢田銚義『昆虫生態学』1903  
 info:ndljp/pid/832681  
<https://www.dl.ndl.go.jp/api/iiif/832681/R0000008/1968,728,1312,1972/full/0/default.jpg>

# - 青空文庫

## - 丘浅次郎「動物界における善と悪」1902

(『進化と人生』東京開成館, 1906)

悪と善るけに界物動

り易い二三の例を挙げたに過ぎぬ故、素より極めて不完全なものであるが、倫理學と生態學との間に離るべからざる關係のあることだけは之に依つて多少明に知れるであらう。

生 人 と 化 進

88

生物學の一分科として動物の習性を研究する學科を生態學 (Ethologia) と名けるが、其語原は倫理學 (Ethica) と同じく、共にギリシヤ語の「習慣」と云ふ字から來て居る、斯くの如く此二學科は元來同様の性質のもので、其間には極めて深い關係のあるべき筈なることは名前の上にも現はれて居るに拘らず、倫理學者は今日まで動物生態學を度外視して専ら抽象的の議論のみを戦はして居たのであるが、我等の考へる所に依れば倫理學の根柢は是非とも之を生態學に求めなければならぬ。生態學に依つて種々の動物の習性を調べ、下等動物より漸々高等動物に至る間の習性の移り行きを明にし、終に人間にまで及ぼせば、此所に初めて倫理學の確固たる基が定まるのであらう。今此所に初めて於ける善惡に就いて述べたことは、我等の考への中から最も解

著作権等の都合により、  
ここに挿入されていた画像を削除しました

新聞記事

『読売新聞』2018年6月4日朝刊

見出し: 翻訳語事情

ecology→生態学 文明批判、社会運動への  
広がり

(執筆者: 齊藤希史)

## Dialogues japonais / Isaac Titsingh

- イサーク・ティチング
- Gallica (Bibliothèque national de France)
- La salle de lecture du département des Manuscrits, BnF

# ヒューマニティーズという方法

## ディシプリンの開放

- 手順と訓練
- 科学と人文学
- 身体化とデジタル化
- 共有の技法
- 人文学と共著論文

## 素人と玄人

- 反証される経験知
- 身体の領域の保持
- 地図と視野
- 方法としてのヒューマニティーズ

# モノと身体

## 脱〈モノ-身体〉

- モノからの解放
- デバイスという補助具
- 工学としてのデジタルヒューマニティーズ
  - 伝統の拡張: 目録・書誌・索引・年譜・校訂・注釈
  - 新たな技法: テクスト分析・画像分析・3D分析

## 即〈モノ-身体〉

- デジタルからモノにたどりつく
- 方法としてのモノ
- 経験の獲得

# ブックガイド

David M. Berry, Anders Fagerjord. Digital Humanities: Knowledge and Critique in a Digital Age. Polity, 2017.

楊曉捷・小松和彦・荒木浩編『デジタル人文学のすすめ』勉誠出版, 2013.

樺山紘一編『図説 本の歴史』河出書房新社, 2011.

アルフレッド・W・クロスビー(小沢千重子訳)『数量化革命 ヨーロッパ派遣をもたらした世界観の誕生』紀伊國屋書店, 2003